

2020年7月26日 大井バプテスト教会 礼拝説教  
説教題「ここに愛がある」第一ヨハネ4章9～10節

主任牧師 加藤 誠

**「神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」(ヨハネの第一の手紙 4章9-10節 口語訳)**

1952年11月23日に献堂されて以来、67年と8ヶ月の間、この礼拝堂で約3500回の主日礼拝がささげられてきました。夕礼拝や祈祷会、さまざまな諸集會に用いられて、また教会員とその家族の結婚式や葬儀、献児式など、この礼拝堂は一人ひとりの人生の大切な節目とありました。あけぼの幼稚園の大勢の卒業生たちの心の中には、この礼拝堂でクリスマス・ページェントをし、卒業証書を受け取った思い出が大切に刻まれていることでしょう。

「1137」。これは、約68年の間にこの礼拝堂でバプテスの恵みにあずかった人々の数です。『五十年史』に、S青年という最後まで大谷賢二牧師の説教に抵抗していた大学生のことが紹介されています。Sさんは熱心だけれどもいつも屁理屈をこねていて、誰も歯が立たなかったと言います。ある日の夕礼拝で説教に立ったI青年の、ご本人の言葉によれば「すっかりあがってしまい、何を語ったのかまったく覚えていない説教」を聞いて信仰決心が与えられたのでした。S青年曰く、「Iさんの熱心に打たれ、今まで神を認めなかった自分の傲慢が砕かれた」と。救いは、人の業、人の知恵の言葉ではない、ただ神の恵みによる、「上からの恵み」の出来事です。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛してくださって、私たちのあがないの供えものとして御子をおつかわしになった。ここに愛がある」(第一ヨハネ4:10)とあるとおり、傲慢にも神の恵みを台無しにし、散々たる生き方しかできない私たちを、それでも愛し抜いてくださる神の恩寵。その恩寵に心動かされた人々によって、この礼拝堂でイエス・キリストが紹介され、キリストと共に生きる恵みが証しされてきました。そのたくさんの恵みを経験させていただいた礼拝堂を、いよいよ神さまにお返しする時を、私たちは迎えようとしています。

司馬遼太郎は、もし無人島に本を一冊持って行くとしたら「歎異抄を持っていく」と言ったそうですが、わたしはやはり『聖書』を持っていきます。約四十年前、大学四年生の時に半年間休学してフランスのラルシュ共同体に出かけた時も、聖書だけをカバンに入れて行きました。すべてに恵まれ、守られていた日本での生活と異なり、障がいをもった人々と一緒に暮らすラルシュ共同体の日々は、「人が生きる意味」について考えさせられることが多く、夜、一人で開いて読んだ『聖書』が、その後の自分の歩みを導く力になりました。

その『聖書』の中でも、特に今、大井教会の聖書日課で読んでいる「ヨブ記」は繰り返し読むに値する書物だと感じています。「人はなぜ生きるのか」、「神は愛であるはずなのに、この世界には、なぜこんなにも不条理な苦難があふれているのか」という、私たちが人として生きる際に必ず直面する問いとヨブは格闘するのです。しかしどんなにヨブが叫んでも、神は沈黙したままです。またヨブを見舞うために四人の友人がやってきますが、彼らとヨブはどれほど言葉を尽くしてもお互いに理解できず、むしろ非難し合う姿を見ていると、人が人を理解することの難しさ、人が苦難を生きる他者と共に歩む難しさを示されます。「神の愛と正義はいったいどこにあるのか？」というヨブの叫びは、ヨブ記の時代から現代に至るまで、おびただしい人々が神に向けてきた叫びです。2020年のこの時にも、私たちの間に、そして世界の中にヨブの叫びはあふれています。

このヨブの叫びに応える方として、神はイエス・キリストを送ってくださいました。「神の愛など、この世界のどこにも見つけられない」と叫ぶ一人ひとりの傍らに、神の愛を届けるために来てくださいました。「あなたの存在は神の目に尊いこと」こと。私たちの目に今は見えていなくても、神は必ずご自身の愛をはっきりと示してくださることを主イエスは教えて下さり、神から遠く離れて散り散りバラバラになっている者たちを神のもとに引き寄せ、神を賛美して生きる喜びを手渡してくださったのでした。

「ここに愛がある」。大井バプテスト教会の礼拝堂では、イエス・キリストの恩寵に触れた一人ひとりの賛美歌がたくさん生まれてきました。聖書のみ言葉そのものが賛美歌になり、み言葉に生きる喜びが賛美歌として歌われていきました。『新生讚美歌ハンドブック』に、新生讚美歌 300 番「罪ゆるされしこの身をば」という讚美歌が誕生したエピソードが記されています。1970年前後の二年半、大井教会が教会闘争の渦中にあつたとき、多くの人が教会から離れ、「教会とは何か」「イエス・キリストを信じるとはどういうことか」、数々の問いを受ける中、教会員による応募賛美歌集「日々とうまれる証しの歌」を編纂した時に近藤清さんの作詞によって生まれたのがこの賛美歌です。思いがけない試練の中で、「イエスこそわが主」という信仰に改めて立たされ、この賛美歌が生まれたとハンドブックには記されています。

あけぼの幼稚園や小学科、子どもコーラスの子どもたちが、大井教会で生まれた賛美歌をほんとうに楽しそうに大きな声で歌うのを聞く時、わたしは最初のクリスマス之夜に、飼い葉桶の中にインマヌエルの幼子を見出だした羊飼いたちが、野原を賛美しながら帰っていった姿が重なります。どんなに夜の闇が深くでも、インマヌエルの主と出会った者たちの心には、喜びと希望の賛美が注がれていく。この礼拝堂を通して与えられた主なる神への賛美を、これからも一人ひとりの証しとして共にささげていきたいのです。